

学生の皆さんへ

若い男女における結婚・出産についての意識調査

大学では皆さんが快適に学生生活を送っていただけるよう、皆さんの健康実態や健康教育の必要性の把握に努めています。

今回、アンケート調査を実施し、よりよい健康管理指導を皆さんに提供できるよう役立てることにしました。調査に協力をお願いいたします。記入者名は伺いませんので、ありのままを気軽に（あまり考えすぎないで）教えてください。

質問票の内容は、データベース化した後、統計処理し、その結果を公表することはありますが、個人が特定されるような情報を公開することは一切ありません。また、回答用紙はデータの入力後、速やかに破棄されます。

もし、協力いただけない場合は、用紙を白紙のまま返却して下さい。協力いただけない場合でも、不利益を被ることは一切ありません。

金沢 大学

尚、本意識調査は厚生労働省：政策科学総合研究事業「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラム開発に関する研究」(25010301)の研究活動のひとつで、研究代表者(山本真由美)の所属大学(岐阜大学大学院医学系研究科 医学研究等倫理審査委員会)の審査で承認されています。

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理

— 質問紙結果から —

研究協力者 佐渡 忠洋 (常葉大学健康プロデュース学部)
研究協力者 堀田 亮 (岐阜大学保健管理センター)
研究分担者 西尾 彰泰 (岐阜大学保健管理センター)

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理を探索的に検討するために、本研究では、平成 25 年度に本研究班が実施した大規模質問紙調査の結果を再度分析した。最初に、心理学的検討に値する項目に着目し、調査で得られた結果を 4 カテゴリー 26 項目に整理して、高校生 1,673 名(平均年齢 16.5 ± 0.74 歳)、大学生 1,118 名(平均年齢 19.75 ± 1.09 歳)を分析の対象とした。まず、26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生に多かった。さらに、高校生と大学生のデータを、それぞれクラスター分析で検討した結果、高校生と大学生とでは質を異にするクラスターが導き出され、社会観や家族観は男女で異なることが示唆された。特に大学生では、男性は社会的な活動に意識が向き、女性は結婚と子どもを持つことに加え、家族や家庭に意識が向いていることが示された。したがって、今後は年齢と性差を考慮して、本研究班が集積してきたデータを分析していく必要性が明らかになった。

A.研究目的

日本が抱える少子化と晩婚化などの問題は、解決困難なものである。容易に解決できるものであれば、これほどまでに問題視されることはなかっただろう。しかし、個人の幸福のみならず、社会の発展を重んじるならば、本問題の探求は続けるべきである。本研究グループは、そうした社会的要請に何らかの形で応えるために組織されたと言っても過言ではない。

厚生労働省科学研究費補助金を受けたわれわれは、本事業の中核に、高校生と大学生に対してライフプランを考える機会を提供することを据えてきた。すなわち、結婚したいと考え、子どもをもちたいと考えている若者に、教育的介入を行うことで、当の若者たちが自らのライフプランが実現できるように支援することが、先述した問題に対して現実的に応える一つの方略であると考えてきた。そのために、平成 25 年度は全国的

なアンケート調査を行うことで仮説の生成に務め、平成 26 年度は DVD 教材を独自に作成し、教育的介入の効果を実証的に検討した。

本事業に対して心理学が貢献できる領域は甚だ限られている。というのも、心理学は主として個を扱う学問であるから、政策や社会へ如何にして介入していくかという直接的な理論を十分有していないためである。しかし、結婚を望むことや子どもを望むことに関連した心理学的な事柄を探求することに関しては、十分貢献できると考えられる。

そこで本研究は、平成 25 年度に実施した大規模質問紙調査の結果を、これまでとは異なる観点から検討することで、結婚を望む若者、子どもを持つことを望む若者の心理に接近しようと考えた。なお、この質問紙の結果は、すでに昨年度の報告書において基礎的な分析を行い、まとめて報告しているものである(山本ら,2014)。

B. 研究方法

1. 対象と手続き

対象は、全国の高校生 1,866 名 (6 校)、および大学生 1,189 名 (11 大学) の、計 3,055 名である。

調査は 2013 年 9 月～2014 年 2 月に行った。対象者に本研究班が作成した質問紙(資料 1)を配布し、自己記入式での回答を求め、回答終了後に回収した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施にあたっては、岐阜大学医学部の医学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 25-268)。

2. 結果の整理

得られた質問紙法の結果の中で、心理学的検討に値する質問項目を抽出して、再度結果を整理した。整理した手段は、表 1 に記した。その結果、4 カテゴリー計 26 項目の項目で以後の検討を進めることになった。対象者の各項目の回答は、必ず「該当する」か「該当しない」のいずれかに分類できる形になっている。

検討は高校生と大学生とを分けて行っていく。質問紙の結果を整理する上で、回答に不備があったデータと、年齢幅を統制するために大学生の場合は 25 歳以上のデータは除外した。その結果、高校生は男性が 1,011 名、女性が 662 名、計 1,673 名(平均年齢 16.5 ± 0.74 歳)が、大学生は男性が 247 名、女性が 856 名、計 1,118 名(平均年齢 19.75 ± 1.09 歳)が検討の対象となった。以下、これを整理データと呼ぶ。

3. 分析

データは、「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」に特に注目しつつ、まずは高校生と大学生とで整理データの出現度数に差があるかを検討する。そのために、高校生と大学生の出現度数を、カイ二乗検定を用

いて比較した。

次に、高校生と大学生とそれぞれで、整理データの項目間の類似・近似関係を検討する。そのために、整理データの各項目に「該当する」場合には 1 を、「該当しない」場合には 2 を与え、階層クラスタ分析(word 法)を用いて分析した。

なお、統計分析には PASW(SPSS) ver.18 を用い、カイ二乗検定では p 値が 0.05 以下を有意差ありと判断した。

C. 研究結果

1. 高校生と大学生との比較

整理データの出現度数を、高校生と大学生とで比較した結果、26 項目中 21 項目に有意差認められた(表 2)。

2. 高校生の整理データにおける項目間関係

高校生のクラスタ分析で導き出されたテンドログラムを図 1 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスタを抽出し、順に《高クラスタ I 》、《高クラスタ II 》、《高クラスタ III 》と名付けた。

3. 大学生の整理データにおける項目間関係

学生のクラスタ分析で導き出されたテンドログラムを図 2 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスタを抽出し、順に《大クラスタ I 》、《大クラスタ II 》、《大クラスタ III 》と名付けた。

表1 平成25年度質問紙調査結果の整理項目（整理する方法と基準）

A. 基本情報

- A1：男性（Q1-2で「男性」と回答）
- A2：女性（Q1-2で「女性」と回答）
- A3：実家に父親がいる（Q1-7で「父」を選択）
- A4：実家に母親がいる（Q1-7で「母」を選択）
- A5：実家にきょうだいがいる（Q1-7で「兄」「姉」「弟」「妹」のいずれかを選択）
- A6：家の経済状態はよい（Q2-11で「上」か「中の上」を選択）
- A7：自分の健康に関心がある（Q2-14で「非常に関心がある」か「まあ関心がある」を選択）

B. 食事・生活

- B1：1年以内に部活をしていた（Q2-3より）
- B2：食事時間が楽しい（Q3-1-aで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B3：食卓の雰囲気は明るい（Q3-1-cで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B4：体型が気になる（Q2-7で「非常に気になる」か「やや気になる」を選択）

C. 人生の中で重視すること（Q2-10-a～kで無回答は該当しないと考えた）。

- C1：人生で勉強が重要（Q2-10-aで3位以上と位置付けた）
- C2：人生で仕事・アルバイトが重要（Q2-10-bで3位以上と位置付けた）
- C3：人生で円満な家庭が重要（Q2-10-cで3位以上と位置付けた）
- C4：人生で趣味やスポーツが重要（Q2-10-dで3位以上と位置付けた）
- C5：人生で健康な体が重要（Q2-10-eで3位以上と位置付けた）
- C6：人生で友人付き合いが重要（Q2-10-fで3位以上と位置付けた）
- C7：人生で異性との付き合いが重要（Q2-10-gで3位以上と位置付けた）
- C8：人生で収入や財産が重要（Q2-10-hで3位以上と位置付けた）
- C9：人生で地位や名声が重要（Q2-10-iで3位以上と位置付けた）
- C10：人生で社会への貢献が重要（Q2-10-jで3位以上と位置付けた）
- C11：人生で子育てが重要（Q2-10-kで3位以上と位置付けた）

D. 将来構想

- D1：将来は経済的に不安（Q2-12で「強く感じている」か「やや感じている」を選択）
 - D2：将来は結婚したい（Q4-1で「いずれ結婚するつもり」を選択）
 - D3：将来は子どもが欲しい（A4-4で「子供は欲しい」を選択）
 - D4：今の家庭が理想的（Q4-12で「思う」を選択）
-

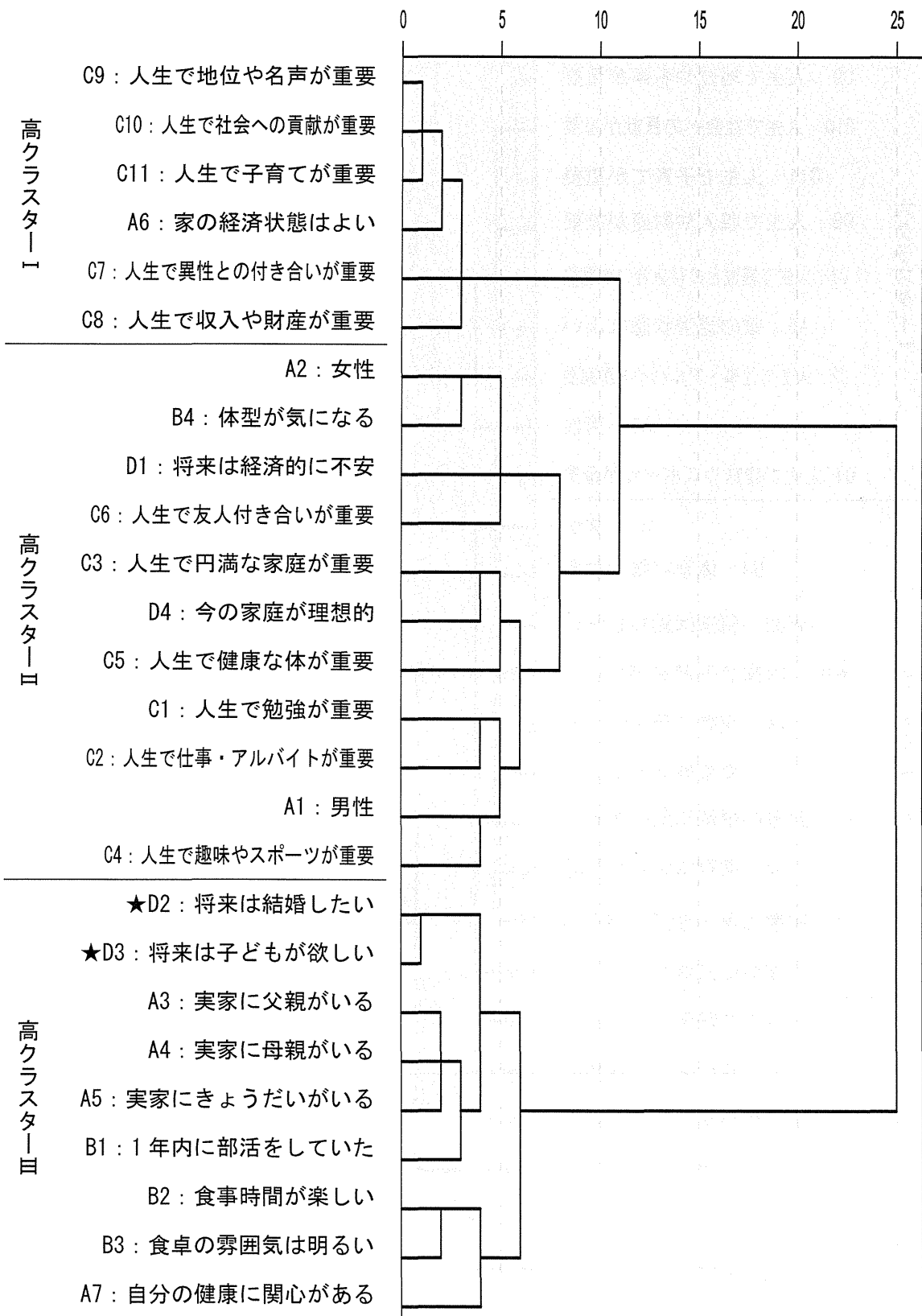


図1 高校生のクラスター分析のデンドログラフ

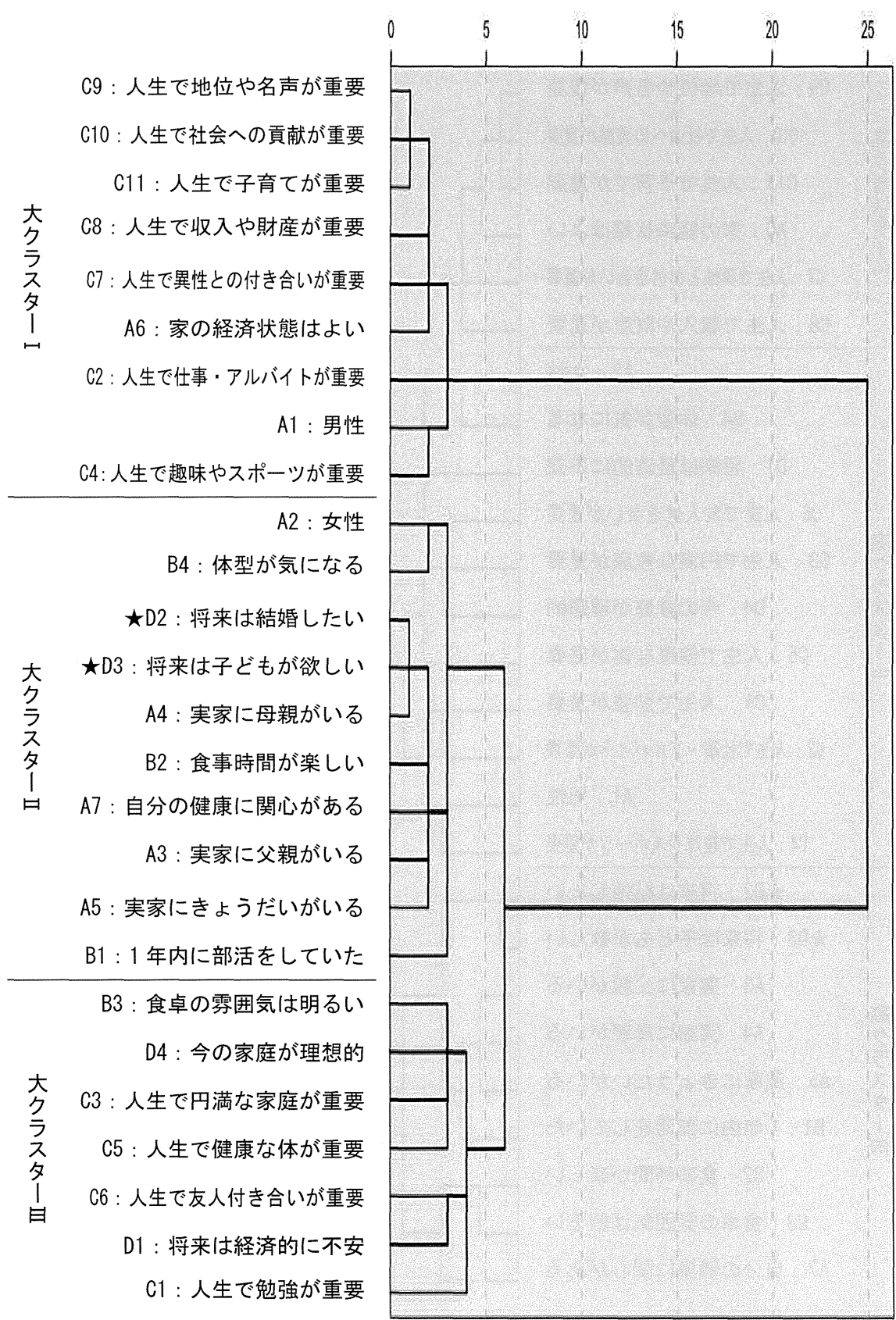


図2 大学生のクラスター分析のデンドログラフ

D. 考察

1. 高校生と大学生との比較結果について

各項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、26項目中21項目で差があった。データが千人以上と多いために、微細な差を抽出した可能性はある。しかし、これほど多くの項目で差が認められたということは、高校生と大学生とでは整理データで異なる傾向を有していると考えらるべきであろう。そのため、高校生と大学生を分けてクラスター分析を行う意義は、十分あると考えられる。

本研究が着目する「D2:将来は結婚したい」と「D3:将来は子どもが欲しい」でも、高校生と大学生とで差が認められ、高校生よりも大学生と有意に多かった。この結果は、人生経験を積み、特に心理的な成長をするにつれ（高校生から大学生の間で肉体的な成長は、心理的なそれほどには顕著ではないだろう）、結婚と子どもをもつことに積極的になる可能性を示唆しているのかもしれない。

2. 高校生のクラスター分析結果について

高校生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

まず、《高クラスターⅠ》内の項目を見ると、地位や社会や経済や収入に関するものが多かったため、社会観に関するクラスターと理解できる。また、《高クラスターⅡ》には両性別が含まれるとともに、健康や自らの家族への態度と関連する項目が多かったため、健康観・家族観に関するクラスターと考えられる。さらに《高クラスターⅢ》には本研究で着目する「D2:将来は結婚したい」と「D3:将来は子どもが欲しい」、および家族・家庭の状況に関する項目が多かったため、最も注目されるべきクラスターであった。この《高クラスターⅢ》で「D2:将来は結婚したい」および

「D3:将来は子どもが欲しい」と、家族・家庭の状況に関する項目がまとまりとして見出されたということは、これらに強い関連があることを示唆している。したがって、もし高校生に「結婚したい」や「子どもが欲しい」との動機付けを行う介入をするのであれば、あるいは「結婚したい」や「子どもが欲しい」の想いを実現できるよう教育的介入を実施するのであれば、個人の家族・家庭状況を踏まえる必要がある。

ただし、本結果の読み取りには注意を要する。「父母がいる」、「きょうだいがいる」、「食事が楽しく食卓が明るい」ということと、「結婚したい」および「子どもが欲しい」との関連は認められたが、そこに如何なる因果関係があることを先の結果は示してはいないからである。この点にわざわざ言及しなければならないのは、統計結果の読み込みに慣れていない者は誤った認識を抱いてしまうため、そして本テーマに敏感な者は的外れな点に批判することが懸念されるためである。つまり例えば、父母がいない者は「結婚したい」や「子どもが欲しい」とは思いにくい、ということを示唆している。

本結果が示しているものは、心理学的には、高校生が抱く「結婚したい」や「子どもが欲しい」という思いは、その者の家族・家庭という内的な対象関係と強く関連しているということであって、それは必ずしも現実の人間関係とは一致しない。配偶者と子どもという存在は、自らの家族のことであるので、それらを望む者が現在の家族に関心を強く持ち、家族にポジティブな思いを抱いていることは自然なことであろう。

なお、本結果で興味深い点は、《高クラスターⅠ》と《高クラスターⅢ》が大きく離れていることである。すなわち、「結婚したい」や

「子どもが欲しい」という思いと社会観とは、統計的に遠い関係にある。この解釈には際してはさまざまなことが考えられるが、まず、自らが家庭を持つということと、社会に出るということが、多くの高校生にとっては相反する関係にあるのかもしれない。社会が自らにとって外部、家庭が自らにとっての内部という関係にあるとすれば、高校生はこの両者を自身の内に抱えるまでに成熟していない可能性がある。これはある意味当然のことである。なぜならば、高校生で一人暮らしをし、自ら生計を立てている者が少ないことから、たいていの高校生は家族と現実的に強く結びついており、社会を直接経験するまでには至っておらず、社会へ進出するのはこれからの心理学的課題になっていると考えられるからである。したがって、先程の内と外という関係で見れば、高校生が社会への関心を持つということは、ともすれば、結婚や子どもをもつこととは別方向に進むことなのかもしれない。これは、結婚と子どもを持つことに関するプロモーションプログラムを高校生に対して実施する際の、留意点となるだろう。結婚と妊娠と就職は、どれも等しく人生の重要エピソードになるからである。

3. 大学生のクラスター分析結果について

大学生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

最初の《大クラスター I》は、高校生の《高クラスター I》と類似するが、さらに男性が加わり、趣味や仕事に関する項目もまとまっている。一般的な意味での「男性らしさ」に関わる項目が集まったクラスターであると考えられる。《大クラスター II》には女性や「D2: 将来は結婚したい」や「D3: 将来は子どもが欲しい」が含まれ、そして家族の状況に関する項

目がまとまった。《大クラスター I》と対比するならば、これは「女性らしさ」と関連があるクラスターかもしれない。《大クラスター III》は《大クラスター II》と統計学的に近似関係にあるものの、現実的な環境の項目が多く位置づけられた。

大学生のクラスター分析結果の特徴は、《大クラスター I》と《大クラスター II》が峻別された点である。《大クラスター I》が示唆するように、男性は社会と自分自身に多く目を向けている。「C11: 人生で子育てが重要」が含まれたのは、以前よりも男性が育児に参加するようになり、「イクメン(育児を積極的に率先して行う男性)」という言葉がメディアで度々取り上げられている現状を想起させる。一方、《大クラスター II》からは、女性が家族・家庭へと目が向け、自らの結婚・妊娠を意識していることがうかがわれる。高校生と対比して考えると、大学生になると男性は自らの外部や社会への意識が向上し、かたや女性は自らの内部や家族への意識が向いていると読むことができる。以前よりも女性参画や女性の活躍が強く謳われるようになり、実際に企業等で実力を発揮している女性が増えているものの、大学生によっては未だに、男性は家の外へ、女性は家の内へ、という志向性が根強く残っているのかもしれない。

E. 結論

現代の若者が抱く「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いが、彼／彼女たちの如何なる現状や未来観、家族観と結びついているかを検討し、いくつかの仮説を導き出した。本稿は、明確な実証を目的とはしていないが、今後、若者たちが「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いを実現していくことを、教育的介入によって支援することを目指すならば、年齢と性差は

重要な要因になることが示された。したがって、平成 26 年度に実施した DVD 教材と教育パンフレットによる効果を検証する際には、年齢と性差を分けて検討していくべきであろう。

【引用文献】

- 1) 山本眞由美研究代表. 若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金政策科学総合研究事業, 平成 25 年度総括・分担研究報告書. 2014.

F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的 QOL、及び過去の食体験の関連について

研究分担者 林 芙美(千葉県立保健医療大学健康科学部)

研究協力者 武見 ゆかり(女子栄養大学栄養学部)

佐藤 ななえ(盛岡大学栄養科学部)

【目的】若い男女における現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的 QOL(以下、SDQOL)、及び過去の食体験が、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と関連があるか検討すること。

【方法】平成 25 年 12 月～翌年 3 月までに、全国 17 施設の高校生・大学生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。回答が得られた 3,055 名のうち、本研究の解析に用いたデータに不備のない者 2,360 名(高校生 1,400 名、大学生 960 名; 男性 1,111 名、女性 1,249 名)を分析対象者とした。結婚や子どもを持つことに対する意識と食知識、食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験との関連を検討するため、基本属性(年齢、学校区分、地域)及び将来における経済的不安感を調整した多重ロジスティック回帰分析を男女別に行った。

【結果】「いずれ結婚するつもり」と回答した者は男性 74%、女性 87%、「子どもは欲しい」と回答した者は男性 85%、女性 91%で、男女間に有意差が認められた。男性では、栄養バランス、SDQOL が良好である者は結婚・子どもの両方と関連していた。女性では、SDQOL のみ結婚・子どもの両方と関連があった。葉酸摂取時期の適正な知識は男女とも結婚のみ関連が見られた。また、過去の食体験は、性別に関係なく結婚・子どもの両方と関連していた。

【結論】現在の食生活や過去の食体験が良好であることは、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな態度と関連している可能性が示唆された。

A. 研究目的

近年、若年男女の結婚意識が消極化していることが、2010 年に国立社会保障・人口問題研究所が実施した出生動向基本調査により報告されている¹⁾。しかし、結婚することの具体的な利点として、男女とも「子供や家庭を持てる」を挙げる者は増加傾向にあることから、結婚意欲は出産意欲等の家族形成意欲と強く結びついていると考えられる。

また、若者は、理想としては子どもを 20 代に第 1 子を生み、トータルで 2～3 人は子どもを持ちたいと考えている。しかし、平均出産時年齢の高齢化や経済的な要因により、希望する妊娠・出産が

出来ていない現実がある。そこで、どのように希望するライフコースを実現していくかを後押しするために、適切な出産や子育てについての理解を深め、出産・育児に対する自信を高めていくための効果的な支援の提供が、現在の少子化対策において重要な課題となっている。

さらに、若年女性のやせが、低出生体重児のリスク等と関連していることも指摘されているため、望ましい栄養状態と食行動の実現に向けた、必要な知識の修得、望ましい食態度の形成、その実現に必要なスキルの修得は、妊娠・出産・子育ての希望が実現できる社会にむけて必要な要素の 1 つと考える。

小林²⁾によると、未来の家庭的食事に対する意識を高めるには、現在の食習慣が重要であり、過去の食体験は、現在の食習慣を介して未来の家庭的食事に間接的に影響していることが報告されている。しかし、現在の肯定的な家族形成意識と、現在あるいは過去の栄養・食生活の関連については報告がない。

そこで、本研究では、若い男女における現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的QOL(以下、SDQOL)、及び過去の食体験が、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と関連があるか検討することを目的とした。

B. 研究方法

平成 25 年度に高校生・大学生を対象に行った『若い男女における結婚・出産についての意識調査』(資料 1)のデータを用い、二次解析を行った。

1. 分析対象者

平成 25 年 12 月～平成 26 年 3 月までに、全国 17 施設の高校生・大学生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。回答が得られた 3,055 名のうち、本研究の解析に用いたデータに不備の無い者 2,360 名(高校生 1,400 名、大学生 960 名;男性 1,111 名、女性 1,249 名)を分析対象者とした。

2. 調査項目

本研究に用いた項目は以下のとおりである。

1) 基本属性

対象者の基本属性として、性別(男女)、学校区分(高校、大学)、地域(施設)を用いた。

2) 将来の経済的不安感

「あなたは、これから先 10 年間の自分自身の生活について経済的な不安を感じていますか?」という質問に対して、「強く感じている」「やや感じている」「どちらともいえない」「あまり感じていない」「全く感じていない」の 5 肢で回答を得た。解

析では、「やや・強く感じている」「どちらともいえない」「あまり・全く感じていない」の 3 区分に対象者を分類し、分析に用いた。

3) 将来の結婚、子どもを持つことに対する意識

将来の結婚に対する意識は、「あなたの結婚に対する考えを教えてください。自分の一生を通じて考えた場合、最もあてはまるものひとつを○で囲んでください」との質問に対し、「いずれ結婚するつもり」「一生結婚するつもりはない」「考えたことがない」の 3 肢で回答を得た。解析では、「いずれ結婚するつもり」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

子どもを持つことに対する意識は、「あなたは、将来、子供が欲しいと思っていますか?現在の気持ちに近い方のいずれかを○で囲んでください」との質問に対し、「子供は欲しくない」「子供は欲しい」の 2 肢で回答を得た。

4) 葉酸摂取に関する食知識

葉酸摂取に関する食知識として、「葉酸不足のリスク」「葉酸の摂取時期」の 2 項目を把握した。

「葉酸不足のリスク」は、「葉酸という栄養素(ビタミン)の摂取不足を予防することで、お腹の中の赤ちゃんに起こる神経管閉鎖障害という病気の危険度を下げると報告されていることを知っていましたか?」という質問に対して、「知っている」「聞いたことはあった」「知らなかった」の 3 肢で回答を得た。解析では、「知っている」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

「葉酸の摂取時期」は、お腹の中の赤ちゃんに起こる神経管閉鎖障害という病気の危険度を下げするために、加工食品などに添加されている葉酸(プテロイルモノグルタミン酸)を付加的に 400 μ g/日とることが推奨されていますが、いつ頃とるとよいと思いますか?との質問に対して、「妊娠前のみ」「妊娠前から妊娠後 3 ヶ月間」「妊娠後 3 ヶ月間のみ」「妊娠中、全期間を通じて」「その他」「わからない・知らない」の 6 肢で回答を得

た。そのうち、適正摂取時期である「妊娠前から妊娠後3ヶ月間」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

5) 現在の食態度

現在の食態度は、「料理の楽しさ」「料理への自信」の2項目を用いた。

「料理の楽しさ」は、過去6ヶ月間を振り返り、「料理をするのは楽しい」との質問に対して、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば当てはまらない」、「当てはまらない」の5肢で回答を得た。解析では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した者を「楽しい」とし、それ以外の者は「それ以外」と回答者を分類し、分析に用いた。同様に、「料理への自信」は、「料理することに自信がある」という質問に対する回答を、「自信があり」と「それ以外」に回答者を分類し、分析に用いた。

6) 現在の食習慣

現在の食習慣は、「栄養バランス」「野菜料理」の2項目で把握した。

「栄養バランス」は、「あなたは、1日のうち、主食(ごはん、パン、めん類等)・主菜(卵、肉、魚、大豆、大豆製品等が主体のおかず)・副菜(野菜、海藻、いも類等が主体のおかず)のそろった食事をどれくらいとっていますか？最も当てはまるものひとつを○で囲んで下さい」との質問に対して、「1日に2回以上」「1日に1回」「週に4~5日」「週に2~3回」「週に1回以下」の5肢で回答を得た。健康日本21(第二次)では、「主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を1日2回以上の日がほぼ毎日の者を割合の増加」を目標に掲げていることから、解析では「1日2回以上」と「1日1回以下」に回答者を分類して用いた。

「野菜料理」は、「あなたは、平均すると1日に野菜料理(野菜を主な材料とした料理)を何皿ぐらい食べていますか？1皿は小鉢1コ分程度と

考えて下さい。野菜ジュースは含めません。過去1ヶ月をふりかえって、あてはまるものひとつを○で囲んでください。」との質問に対して、「ほとんど食べない」「1~2皿」「3~4皿」「5~6皿」「7皿以上」の5肢で回答を得た。食事バランスガイド(厚生労働省・農林水産省)では、野菜料理の目安を5皿程度としていることから、「1日5皿以上」と「1日4皿以下」に回答者を分類して用いた。

7) 食に関する主観的QOL(SDQOL)

SDQOLは、會退ら³⁾の4項目からなる尺度を用いて把握した。SDQOLは、①食事時間が楽しい、②食事の時間が待ち遠しい、③食卓の雰囲気は明るい、④日々の食事に満足している、の4項目からなり、信頼性・妥当性が確認されている。回答はそれぞれの項目に対して「当てはまる」(5点)、「どちらかといえば当てはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「どちらかといえば当てはまらない」(2点)、「当てはまらない」(1点)とし合計得点を算出した。解析では、中央値(16点)以上と中央値以下に回答者を分類し、分析に用いた。

8) 過去の食体験

過去の食体験は、「あなたの小学生の頃の食生活を思い出してみてください。自分の家は、食事が楽しく心地よかったという印象を持っていますか？」との質問に対して、「持っている」「どちらかといえば持っている」「どちらともいえない」「どちらかといえば持っていない」「全く持っていない」の5肢で回答を得た。解析では、「持っている」「どちらかといえば持っている」を「楽しく心地よかった」とし、「どちらともいえない」「どちらかといえば持っていない」「全く持っていない」を「それ以外」として回答者を分類し、分析に用いた。

3. 統計解析

検討に用いた項目について、男女及び学校区分間で χ^2 検定を用い記述的な検討を行った。さらに、結婚や子どもを持つことに対する意識と

食知識や食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験との関連についてロジスティック回帰分析を用いて行った。モデル1では、各項目について粗オッズ比及び 95%信頼区間を求め、モデル2では性別、学校区分、地域、及び将来における経済的不安感を調整したオッズ比及び 95%信頼区間を多重ロジスティック回帰分析により求めた。いずれの検討も男女別に行った。すべての統計解析には IBM SPSS Statistics Ver. 22 を用い、有意水準は 5%とした。

(倫理面への配慮)

調査に際しては、回答は自由意志に基づくものであることを文書にて説明し、回答を持って協力を同意したとみなした。なお、協力を希望しない学生に対して、授業等で不利益が生じないように配慮した。本研究の実施にあたっては、「疫学研究に関する倫理指針」(厚生労働省)を遵守し、岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の審査承認を受けた(承認番号 25-268)。

C. 研究結果

1. 男女別にみた対象者の基本属性及び主な調査項目への回答状況(表 1)

対象者の性別は、高校で男性が約 8 割、大学では女性が約 6 割で、学校区分で男女の分布に有意差がみられた。また、将来の経済的不安では、「やや・強く感じている」と回答した者が最も多く、男女ともに半数を超えていた($p=0.004$)。

将来の結婚・子どもについては、男女とも望む者が多かった。まず、「いずれ結婚するつもり」は、男性 74.4%、女性 87.2%であり、有意に女子の方が多かった($p<0.001$)。「子供は欲しい」では、男性 84.8%、女性 90.8%と、男女間に有意差がみられた($p<0.001$)。

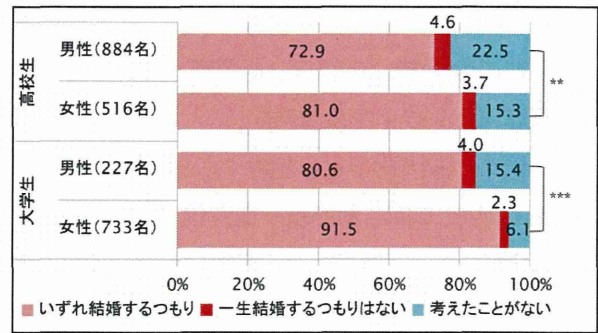


図 1 結婚に対する考え(学校、男女別)

χ^2 検定: ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

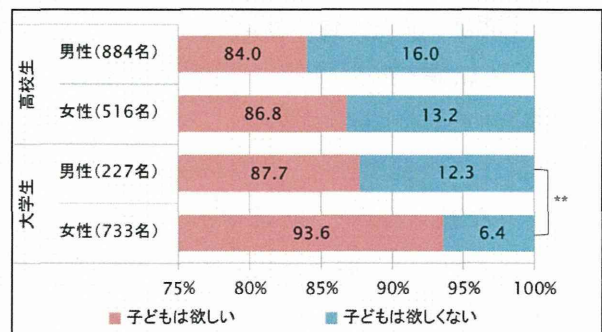


図 2 子どもを持つことに対する考え(学校、男女別)

χ^2 検定: ** $p<0.01$

葉酸に関する食知識では、男女とも知らない者が多かったが、いずれの項目で女性の方が適正回答者は多かった($p<0.001$)。

食態度では、料理の楽しさでは、女性で有意に「楽しい」と回答した者が多かった($p<0.001$)。一方で、料理への自信では、男女とも「自信あり」と回答した者が少なく、有意な男女差はみられなかった。

現在の食習慣のうち、栄養バランスでは、女性に比べて男性で適正者が多かった($p<0.001$)。一方で、野菜料理では、有意な男女差はみられなかった。

過去の食体験、及び SDQOL はいずれも男女間で有意な差が見られ、女性の方が良好な回答をする者が多かった($p<0.001$)。

2. 将来の結婚・子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食態度、食習慣及び SDQOL の関連について(表 2、表 3)

将来の結婚・子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食態度、食習慣及び SDQOL の関連について検討した。葉酸に関する食知識は、男女とも子どもを持つことに対する前向きな姿勢と関連がみられなかった。一方で、葉酸の摂取時期に関する知識は、結婚に対する前向きな態度と男女とも有意な関連が見られた(表 2)。

食態度、過去の食体験、及び SDQOL は、男女とも結婚・子どもを持つことに対する前向きな態度と有意に関連していた。

現在の食習慣では、男性のみ栄養バランスが良好な者において、結婚や子どもを持つことに対する前向きな態度が示された。女性では、同様の関連性は見られなかった。また、男女とも、野菜料理とは有意な関連は見られなかった。

D. 考察

本研究では、高校生・大学生の若い男女を対象に、将来の結婚及び子どもを持つことに対する前向きな態度と、現在の食知識、食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験の関係を検討した。その結果、結婚や子どもを持つことに前向きな態度は、高校生・大学生ともに、男性に比べ、女性で多かった。また、多重ロジスティック回帰分析の結果、現在の食態度や SDQOL、過去の食体験が良好である者は、将来に対する性別や経済的な不安感に関係なく、結婚や子どもを持つことに対して前向きな態度を持っていることが分かった。また、男性のみで、葉酸の摂取時期に関する食知識や栄養バランスとの有意な関連が示された。

先行研究²⁾では、未来の家庭的食事に対する意識は、現在の食習慣を介して、過去の食に関する環境や体験も間接的に影響することを報告している。モデル 2 では、性別に関係なく、現在の

食生活や過去の食体験が良好な者では、結婚や子どもを持つことに前向きであった。したがって、現在の食生活の質や、過去の食体験は、良好なライフプランニングに影響する可能性が示唆された。

なお、葉酸に関する食知識では、葉酸不足のリスク並びに適正な摂取時期のいずれにおいても、適正な回答者が男女とも少なかった。葉酸は、妊娠可能な年齢の女性において大切な栄養素であり、十分な摂取が望まれる。したがって、今後の栄養教育においては、葉酸摂取と神経管閉鎖障害発症リスク低減に関する知識の普及や、若い男女のヘルスリテラシーの向上を狙った取り組みが改めて重要であると考えられる。

本研究の限界として、対象者が一部の協力の得られた高校生・大学生であったことがある。したがって、結果の解釈には留意が必要である。結論を一般化するためには、適正なサンプリングにより調査を行うことが今後の課題である。

E. 結論

現在や過去の食生活に満足度が高い者では、将来の経済的不安に関わらず、前向きな家族形成意欲を持つ可能性が高かった。したがって、子どもの頃から家族での楽しい共食機会を増やすことは、若い男女の結婚や出産に関するヘルスプロモーションにおいても重要な要素であると考えられた。また、食生活の満足度だけでなく、料理の楽しさも性別に関係なく関連していた。そこで、学校教育においては、家庭科等において、調理や食事管理のスキル修得だけでなく、食事づくりが楽しいという前向きな姿勢も育めるよう、カリキュラムの目的や内容を工夫していくことが望まれる。

【参考文献】

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所. 第 14 回 出生動向基本調査- 結婚と出産に関する

全国調査-. 2010年

- 2) 小林敬子. 過去の食に関する環境および体験が現在および未来の食生活に及ぼす影響. 学校保健研究 2003; 45: 200-217.
- 3) 會退友美, 赤松理恵, 林芙美, 他. 成人期における食に関する主観的 QOL (subjective diet-related quality of life(SDQOL))の信頼性と妥当性の検討. 栄養学雑誌 2012; 70: 181-187.

F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表
 - 1) 林芙美, 西尾彰泰, 堀田亮, 佐渡忠洋, 吉川弘明, 足立由美, 松浦賢長, 山本眞由美: 高校生・大学生における将来の結婚や子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食習慣、食に関する主観的 QOL の関連について. 第 61 回日本学校保健学会学術大会 於 石川県教育会館 2014.11.16(石川県金沢市)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

表1 対象者の基本属性及び主な調査項目への回答状況(男女別)

		男性(n = 1,111)		女性(n = 1,249)		χ^2
		n	%	n	%	
基本属性						
学校区分	高校	884	79.6	516	41.3	<0.001
	大学	227	20.4	733	58.7	
将来の経済的不安	やや・強く感じている	592	53.3	703	56.3	0.004
	どちらともいえない	308	27.7	275	22.0	
	あまり・全く感じていない	211	19.0	271	21.7	
将来の結婚・子どもについて						
結婚	いずれ結婚するつもり	827	74.4	1,089	87.2	<0.001
	それ以外	284	25.6	160	12.8	
子ども	子供は欲しい	942	84.8	1,134	90.8	<0.001
	子供は欲しくない	169	15.2	115	9.2	
食知識						
葉酸不足のリスク	知っている	251	22.6	421	33.7	<0.001
	それ以外	860	77.4	828	66.3	
葉酸の摂取時期	妊娠前から妊娠後3ヶ月間	131	11.8	211	16.9	<0.001
	それ以外	980	88.2	1,038	83.1	
食態度						
料理の楽しさ	楽しい	571	51.4	809	64.8	<0.001
	それ以外	540	48.6	440	35.2	
料理への自信	自信あり	280	25.2	315	25.2	0.99
	それ以外	831	74.8	934	74.8	
食習慣						
栄養バランス	1日2回以上	484	43.6	358	28.7	<0.001
	1日1回以下	627	56.4	891	71.3	
野菜料理	1日5皿以上	75	6.8	83	6.6	0.92
	1日4皿以下	1,036	93.2	1,166	93.4	
SDQOL	中央値以上	546	49.1	743	59.5	<0.001
	中央値以下	565	50.9	506	40.5	
過去の食体験	楽しく心地よかった	849	76.5	1,015	81.3	0.004
	それ以外	261	23.5	234	18.7	

表2 結婚に対する前向きな態度と、現在の食知識、食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験の関連(男女別)

			男性 (n=1,111)					女性 (n=1,249)				
			モデル1		モデル2			モデル1		モデル2		
			人数(%)*	粗オッズ比	95%CI	調整オッズ比	95%CI	人数(%)*	粗オッズ比	95%CI	調整オッズ比	95%CI
食知識	葉酸不足のリスク	知っている	187 (74.5)	1.00	0.73 - 1.39	0.96	0.69 - 1.33	381 (90.5)	1.61	1.11 - 2.36	1.15	0.77 - 1.72
		それ以外	640 (74.4)	1.00		1.00		708 (85.5)	1.00		1.00	
	葉酸の摂取時期	妊娠前~3か月間	109 (83.2)	1.81	1.12 - 2.92	1.80	1.11 - 2.92	197 (93.4)	2.30	1.30 - 4.07	1.94	1.09 - 3.47
		それ以外	718 (73.3)	1.00		1.00		892 (85.9)	1.00		1.00	
食態度	料理の楽しさ	楽しい	456 (79.9)	1.81	1.37 - 2.38	1.82	1.38 - 2.39	728 (90.0)	1.97	1.41 - 2.75	2.14	1.52 - 3.02
		それ以外	371 (68.7)	1.00		1.00		361 (82.0)	1.00		1.00	
	料理への自信	自信あり	224 (80.0)	1.51	1.09 - 2.10	1.49	1.07 - 2.07	291 (92.4)	2.07	1.31 - 3.26	2.33	1.47 - 3.70
		それ以外	603 (72.6)	1.00		1.00		798 (85.4)	1.00		1.00	
食習慣	栄養バランス	1日2回以上	377 (77.9)	1.39	1.05 - 1.83	1.51	1.14 - 2.01	312 (87.2)	1.00	0.69 - 1.44	1.12	0.77 - 1.63
		1日1回以下	450 (71.8)	1.00		1.00		777 (87.2)	1.00		1.00	
	野菜料理	1日5皿以上	52 (69.3)	0.76	0.46 - 1.27	0.81	0.48 - 1.35	73 (88.0)	1.08	0.55 - 2.13	1.19	0.59 - 2.38
		1日4皿以下	775 (74.8)	1.00		1.00		1,016 (87.1)	1.00		1.00	
SDQOL		中央値以上	436 (79.9)	1.76	1.34 - 2.32	1.71	1.30 - 2.26	667 (89.8)	1.74	1.25 - 2.44	1.61	1.14 - 1.72
		中央値未満	391 (69.2)	1.00		1.00		422 (83.4)	1.00		1.00	
過去の食体験		楽しく心地よかった	676 (79.6)	2.89	2.15 - 3.89	2.78	2.06 - 3.76	911 (89.8)	2.76	1.92 - 3.96	2.58	1.78 - 3.74
		それ以外	150 (57.5)	1.00		1.00		178 (76.1)	1.00		1.00	

*各項目において「いずれ結婚するつもり」と回答した者の人数と割合(%)を示した。

モデル1では、各変数の粗オッズ比及び95%信頼区間を求めた。

モデル2では、年齢、地域、区分(大学・高校)、10年先までの経済的な不安を調整し、調整後オッズ比及び95%信頼区間を求めた。

表3 子どもを持つことに対する前向きな態度と、現在の食知識、食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験の関連(男女別)

			男性 (n=1,111)					女性 (n=1,249)				
			モデル1		モデル2			モデル1		モデル2		
			人数(%)*	粗オッズ比	95%CI	調整オッズ比	95%CI	人数(%)*	粗オッズ比	95%CI	調整オッズ比	95%CI
食知識	葉酸不足のリスク	知っている	208 (82.9)	0.83	0.57 - 1.21	0.82	0.56 - 1.20	386 (91.7)	1.18	0.78 - 1.79	0.89	0.57 - 1.39
		それ以外	734 (85.3)	1.00		1.00		748 (90.3)	1.00		1.00	
	葉酸の摂取時期	妊娠前~3か月間	117 (89.3)	1.57	0.88 - 2.81	1.58	0.88 - 2.84	199 (93.8)	1.66	0.91 - 3.02	1.45	0.79 - 2.66
		それ以外	825 (84.2)	1.00		1.00		936 (90.2)	1.00		1.00	
食態度	料理の楽しさ	楽しい	503 (88.1)	1.70	1.22 - 2.37	1.72	1.23 - 2.40	752 (93.0)	2.00	1.36 - 2.95	2.13	1.44 - 3.15
		それ以外	439 (81.3)	1.00		1.00		382 (86.8)	1.00		1.00	
	料理への自信	自信あり	252 (90.0)	1.84	1.20 - 2.83	1.82	1.18 - 2.80	294 (93.3)	1.57	0.96 - 2.56	1.72	1.05 - 2.83
それ以外		690 (83.0)	1.00		1.00		840 (89.9)	1.00		1.00		
食習慣	栄養バランス	1日2回以上	422 (87.2)	1.40	1.00 - 1.96	1.50	1.06 - 2.11	323 (90.2)	0.91	0.60 - 1.38	1.02	0.67 - 1.57
		1日1回以下	520 (82.9)	1.00		1.00		811 (91.0)	1.00		1.00	
	野菜料理	1日5皿以上	63 (84.0)	0.94	0.49 - 1.78	0.98	0.52 - 1.87	73 (88.0)	0.72	0.36 - 1.44	0.79	0.39 - 1.60
1日4皿以下		879 (84.8)	1.00		1.00		1,061 (91.0)	1.00		1.00		
SDQOL	中央値以上	487 (89.2)	2.00	1.42 - 2.81	1.98	1.40 - 2.79	686 (92.3)	1.56	1.06 - 2.29	1.51	1.02 - 2.24	
	中央値未満	455 (80.5)	1.00		1.00		448 (88.5)	1.00		1.00		
過去の食体験	楽しく心地よかった	楽しく心地よかった	743 (87.5)	2.23	1.57 - 3.16	2.13	1.50 - 3.03	942 (92.8)	2.82	1.87 - 4.25	2.76	1.81 - 4.19
		それ以外	198 (75.9)	1.00		1.00		192 (82.1)	1.00		1.00	

* 各項目において「子供は欲しい」と回答した者の人数と割合(%)を示した。

モデル1では、各変数の粗オッズ比及び95%信頼区間を求めた。

モデル2では、年齢、地域、区分(大学・高校)、10年先までの経済的な不安を調整し、調整後オッズ比及び95%信頼区間を求めた。

思春期後期における結婚、出産のライフデザインに関連する不妊や月経教育との関連に関する調査

研究分担者 高田 昌代(神戸市看護大学助産学専攻科)
研究協力者 宮下ルリ子(神戸市看護大学助産学専攻科)
安達久美子(首都大学東京健康福祉学部)
有園 博子(兵庫教育大学大学院臨床心理学)
井上 裕子(神戸市須磨翔風高校)
勝木 洋子(神戸親和女子大学発達教育学部)
甲村 弘子(大阪樟蔭女子大学児童学部)

不妊や月経に関する知識及び行動が、自分自身の妊娠・出産のライフデザインに関する意識と関連しているかを明らかにすることと、月経、不妊等に関する知識伝達型の健康教育の有用性を検証することで、若い女性の健康教育、健康支援のあり方を考えることを目的に本調査を行った。

方法は、全国の協力のあった高校生、大学生を対象に質問紙調査(調査1)、DVD 視聴などの教育の介入による知識獲得の比較調査を行なった。その結果、

1. 高校生・大学生の3人に1人以上がどこかの機会に、不妊の定義の知識を得ている。
2. 月経痛は約7割の高校生・大学生が経験しており、月経時鎮痛薬を服用している高校生、大学生は約4割である。
3. DVD 視聴等の系統的で正確な知識の提供は、月経や妊娠・出産、不妊、避妊の正しい知識の獲得に有効であった。
4. 不妊の知識を学ぶ機会は、結婚、妊娠・出産のライフデザインを考える機会になることが示唆された。
5. 女性たちが健康に生きるための「自分の体を知る」という健康教育を、若者たちに実施する必要があると考える。

A.研究目的

近年、妊娠年齢が上昇し、それに伴う妊娠・出産における合併症も高率に見られるようになってきている。妊娠は、母体年齢との関係が大きく、自然死産率や先天異常児の発生件数などは年齢が上がるにつれ増加する。さらに、出産年齢は妊孕性にも関連し、年齢高くなることにより妊孕率は低下し、不妊症の治療効果も低くなる。

不妊症に関連する子宮内膜症も生殖年齢にある女性の罹患率が高い。子宮内膜症は、月経困難症と関連がある。その原因は月経血の逆流の説が有力視されている。思春期にある女性では月

経困難症の発症率が高いにもかかわらず、受診や内服、相談など積極的な対応をすることなく放置する傾向にある。

女性が産む性として将来的に妊娠・出産を選択した場合、年齢や身体の問題が妊娠・出産に影響することがある。そのため、女性は自分のライフプランを、妊孕力や月経困難症などの対処を理解したうえで考える必要がある。

そこで現状として、不妊や月経に関する知識及び行動が、自分自身の妊娠・出産のライフデザインに関する意識と関連しているかを明らかにすることと、月経、不妊等に関する知識伝達型の健康

教育の有用性を検証することで、若い女性の健康教育、健康支援のあり方を考えることを目的に本調査を行った。

B.研究方法

【調査1】

1. 研究対象者

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)総括研究報告書「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究」において意識調査した、全国の高校生 1,866 人(6 校)、大学生 1,189 人(11 大学)、計 3,055 人のうち、女性のみ高校生 727 人、大学生 914 人、合計 1,641 人である。

2. 調査内容

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)総括研究報告書「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究」で使用した、若い男女を対象とした意識調査のための質問紙内容である。そのなかでも、本調査は結婚・出産についての意識、一般的な不妊症、女性の年齢と妊孕力の低下、避妊などに関する知識、月経に関連した症状やその自己管理の方法などについての質問を用いた。

3. 調査方法

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)総括研究報告書を参照。

研究分担者が、全国の高校と大学に、保健教育などの機会を利用し、質問紙調査の実施を依頼した。調査方法としては、対象者に質問紙を配布し、自己記入式回答の後、解答用紙をすべて回収した。

4. 分析方法

不妊や月経に関する知識及び行動と結婚、出産のライフデザインに関する意識との関連を、統

計学的分析を用いて行なった。有意確率は 0.05%以下とした。解析には、SPSS Ver. 19 (日本 IBM) を使用した。

5. 倫理的配慮

調査の実施に際しては、この調査の目的と趣旨の説明文書を配布し、また口頭でも十分に説明した上で、自由意思による回答協力を求めた。回答内容は学業の評価にはまったく関係なく、協力をしなかったとしても不利益を被ることは一切ない事も十分に説明した。

本研究の実施にあたっては「疫学研究に関する倫理指針」(厚生労働省)を遵守し、研究倫理審査委員会の審査承認を受けた。(第 195 回 岐阜大学大学院医学系研究科 医学研究等倫理審査委員会 承認番号 25-268)

【調査2】

1. 研究対象者

研究対象者は、研究分担者が、全国の高校と大学に、授業や講義などの機会を利用して実施してもらえよう担当教員及び教諭に依頼し、協力が得られた高校 6 校、大学 10 校の高校生、大学生である。対象人数は、全国の高校生 875 人(6 校)、大学生 1,271 人(10 大学)、計 2,146 人うち、本調査では女性のみ、高校生 478 人、大学生 822 人、合計 1,300 人である。

2. 調査内容

調査内容は、平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)

「若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究」において、DVD 等の教育介入を行なった成果を明らかにするために検討された内容である。具体的には、月経、妊娠、出産、不妊、栄養の関する正答の 14 項目(講義前後)と意識に関する 4 項目(講義前調査のみ)、ライフプランの関する調査 6 項目(講義後調査のみ)である。本調査研